

生活科・総合的な学習の時間分科会報告

はじめに

今年度の分科会では以下の報告を検討した。

- ① 「知ろう、学ぼう利尻のウニ(うにっこ探検隊)」(山本民・利尻町立杓形小学校)
- ② えりもの漁業の現状報告(小川貴弘・利尻町立杓形小学校)
- ③ 「平岸りんごの総合、その後」(上野香穂・札幌市立緑小学校)
- ④ 「生物多様性から平和を構築するということ 外来種と絶滅危惧種 レイチェルカーソンの教えから」(佐藤広也・北海道教育大学非常勤講師)
- ⑤ 「感染者数とスペイン風邪授業の構想」(村越含博・美唄市立)
- ⑥ 「ブラジルにおけるシティズンシップ教育の動向-「総合的な学習の時間」の観点から一考察-」(山口アンナ真美・北海道教育大学非常勤講師)

以下その概要と検討について示す。

①山本報告

利尻町立杓形小学校 5 年生 11 人が総合的な学習の時間で取り組んだ「知ろう、学ぼう利尻のウニ(うにっこ探検隊)」である。

漁業を基幹産業とする地域で、5 年生の総合ではウニとホッケの学習を行うことになっていたという。しかし見学学習以外は専らインターネットなどの調べ学習であることの克服を目指して、右のような学習計画を立てた。

導入でウニについて「食べたことがあるか」「どんなことを知っているか」と問うたところ、半数ぐらいの子どもから「普段はあまり食べない」、「においがいや」という声があがり、ウニについてはほとんど何も知らないか自信が無くて発表できない様子であったという。

ウニの調べ学習では種苗センターのガイドブックからインターネットや家庭での聞き取りにつなげ結果を共有した。あまり積極的でない子どもが家庭で「利尻で採れるのは6月～」と聞いてきたが、そこから広げて追求できない。「ほかの地域でウニが取れる時期について調べたら？」という教師の声かけから「日本海側では5～8月、オホーツク海側では2～5月、えりもでは1～3月に採れる」ことが分かった。さらにそこから「なんでそうなんだろう？」と追求につなげる指導を教師が問題意識として気づく契機を見ることができた。

この後の種苗センター見学でも、見学しても不明確であったり、さらなる疑問が生まれたりしたことを追求の芽として、種苗センターの出張授業につなげ、子どもたちの追求が進んでいく。特にウニの生態や受精など自然科学的な学びを子どもたちは自分の疑問にこだわって丁寧に追求し、その成果は個人の新聞としてまとめられた。



1	総	ウニについて知っていることを出し合う。タブレットを使い、インターネットでも情報収集をする。
2	合	
3	③	情報を整理する。
	国	① 国語「話し言葉と書き言葉」「敬語」話し言葉と書き言葉の違い・質問するときの言葉づかいなどを考える
	②	② 種苗センター見学時の質問を考える。
4		質問の整理と事前指導
5	総	ウニ種苗センターを見学する。
6	合	
7	⑥	お礼の手紙と情報の整理
8		出前授業
9		お礼の手紙と情報の整理
	国	ポスターを作ろう 伝えたいことを定め、取材し、構成を考えて新聞を作る。(道新小学生新聞グランプリに応募)
	④	

授業の検討では、このような学びを生産労働や流通など社会科学的な追求に方向づけていくために、今回の学びからどのように脈絡づけていくかが話し合われた。



② 小川報告

えりも町立えりも岬小学校の小川は、えりも町の漁業の深刻な赤潮被害の現状を報告した。①の山本報告のウニの学習と関わって、大々的に報道もされたウニの大量死とえりもの漁業の様子を、利尻とえりもの学校を遠隔方式でつないで合同授業ができないだろうかという発想から、小川に報告を依頼したというのが実情である。①の山元も北海道の太平洋沿岸の漁業被害のニュース映像を子どもに見せて伏線を張ったところ、子どもたちからは「あんなに(ウニが)いっぱい打ち上がってたら大変じゃん!!」の声が、さらに教師から「この先何年かウニ獲れないらしいよ」に「えー!! じゃあ利尻のウニめっちゃ売れんじゃねー」の声が上がったという。



報告では、町内で多くのウニの死骸が打ち上げられ、9割方は被害を受けているのではないかと、今の稚貝ウニが大きくなるまで5年にかかるので、回復には7~8年にかかるのではないかとされた。さらにウニに止まらず、ツブは全滅か、真ツブも灯台ツブも上がってこない。ホッキは漁をしたら、死んでいたので漁を中止している。タコはなわやかごなどに死んだのがかかっている。沖や沿海にいる魚、定置網にかかった魚の多くは、エラが白くなって死んでいる。また赤潮だけの影響ではないが鮭は全然漁がなく、とれても、大量に死んでおり、襟裳岬以東の定置網は自主規制中で、川へ遡上させるようにしているとのことであった。ただ何故か鱈は豊漁だということである。

小川の報告からは、漁業の学習が環境問題やグローバル化とSDGs、自分たちの生活に及ぼす影響をふまえた地域経済の盛衰のリアルな需要と供給の原理をとらえる学びにつながることを示唆するものであった。

また、たくさん獲れているブリを漁業経営としてどう考えていくかの授業にも取り組んでいく方向性についても話し合われた。

ここからの授業化に期待したい。

③ 上野報告

初任校でありながら、上野は数年来、平岸リンゴの総合学習の中核として学年全体で取り組み本分科会でも報告して来た。今回は口頭報告ではあったが、蓄積をふまえ、中学年の地域学習として3、4年の単元開発構想のアウトラインを示した。

3年では、地域にリンゴに関わるもの（豊平区の建物やいろいろなものに使われているシンボルマーク）、りんごそのもの（種類や生育・世話）を調べる、昔りんごを作っていたことや、国道にりんご並木があることなどから、地域とりんご歴史を学ぶ。

4年生はりんご並木探検をして、地域の美園りんご会とつながる。せわは区役所・JAが行なっていることを学ぶ。りんご倉庫の探検から、倉庫の地域住民による利活用からまちづくりについて学ぶ。

本年度は学校にりんごの木が2本あるが、美園りんご会・区役所・JAを介してかつてりんご農家をしていた人と繋がり、あかねつがるではないかと判定してもらった。木の剪定、袋欠けなどについても指導してもらったという。今年は学校のりんごの木で子どもたちが文字りんごづくりにもチャレンジした。



札幌をはじめ、北海道でもなかなかりんごを教材にして学ぶと言うことは無くなって来ている。札幌市内の新たな総合の単元開発を学校として行なったといえるだろう。

④ 佐藤報告

複数の大学で総合的な学習や生活科の教職科目を担当する佐藤は、ザリガニから学校での学習をはじめとする環境教育や体験的学習が、日常の現実世界と乖離している現状について報告を行った。

生活科や総合でザリガニを飼育することは多いが、そのほとんどは外来種であるアメリカザリガニである。特に生活科では新設以来、教科書にも生物の飼育で掲載され、学校で実際に飼育観察していることが普通になっているが、そこでは生き物に寄り添い、命の大切さに気づくことが求められる。しかし外来種であるアメリカザリガニは我が国では駆除の対象であり、そこにある矛盾については、子どもはもちろん、教師も見逃している現状がある。札幌市内を流れる安春川でのフィール



ド学習で、大学生たちはアメリカザリガニの繁殖力を目の当たりにして驚いたという。また道内でもウチダザリガニの繁殖拡大が危惧されている。佐藤は R.カーソンの『沈黙の春』と目の前の地域の変化を重ねながら見つめたり、迫を科学的にとらえ返したりすることが I（私は）だけではなく、We（私たちは）の視点で、さらには me too（運動としての行動）へと連続していくような総合学習が求められるのではと締めくくった。

⑤ 村越報告

昨年末、新型コロナを学ぶ総合に取り組んできた村越は、そのような学習の今後の展開として以下の2つの授業構想について報告した

1つは緊急事態宣言の解除やワクチン接種が進む状況の変化を背景に、これまでのコロナの感染状況の推移を感染者の年代別や地域別にクイズ方式で学び、イギリスの再感染拡大の状況と日英の両政府の感染対策の比較を通じて、今後の新型コロナウイルス感染者数を予想する授業の構想を示した。

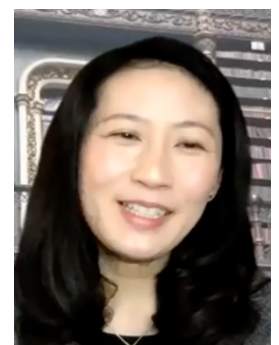
もう1つは大正期のスペイン風邪が我が国や諸外国に与えた社会的影響や収束期間について学び、それを踏まえて新型コロナ禍を含む感染症の今後について予想する授業の構想である。

村越報告に関わって、山口はブラジルの新型コロナ禍の社会や学校の現状報告があった。ブラジルでは、経済優先政策の結果、親族・家族で新型コロナによって誰かが亡くなっていると言っても過言でない状況になっており、11月に学校再開になったが新型コロナに関わる知見も経済格差や価値観によって多様だという。新型コロナ禍は1つの国だけの問題でなく、グローバリズムの中での問題であり感染状況やワクチン政策などの視点から実践を模索する事が必要であろう。この足がかりとして、サンパウロの学校と北海道の学校で、コロナ禍の現状や意識を交換するような授業ができないかについても意見が交わされた。



⑦ 山口報告

報告はブラジルの軍事政権下の「道徳と公民教育」が、民主化を背景に置き換えられた2003年からの「倫理とシティズンシップ教育」を、我が国の総合的な学習の時間と比較し考察するものであった。倫理とシティズンシップ教育は教科横断的な学習に位置づけられ、教科書を作らず、教員や地域の共同により社会参画を目標とした事が共通しているとした。しかし倫理とシティズンシップ教育では時数は定められておらずプロジェクト型学習であること、評価を行わないことが異なる点である。ただ、そこでは「倫理・民主的共存・人権・社会的包摂」の資料が作られ、学校や地域主導の理念が尊重されてきた。しかし、2009年からデジタル教材と共に定型化したプログラムが提示され政府主導に傾斜してきたという。その背景には、地域と共同したカリキュラム開発や、学校の主体的な授業開発の困難さがあり、この点は我が国の総合的な学習の時間をはじめ、GIGA スクール構想が進む現状と重なる点もあると言えよう。報告者は「ブラジルのシティズンシップ教育は、きわめてナショナルな排他的性質をもつ実践へと転化しつつある。30年間続いた教育や社会の民主化の挑戦は再び岐路に立たされていて、今後



の政策動向を注視していく必要がある。」と締めくくった。




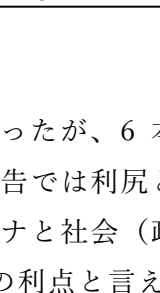
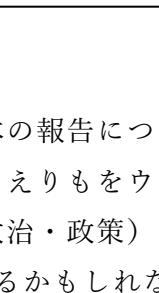
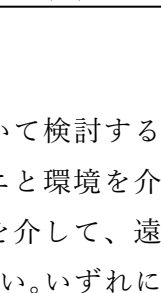
実施方法：プロジェクト型

「倫理」	「民主的共存」	「人権」	「社会的包摂」
<p>Módulo de Ética</p> 	<p>Módulo de Convivência Democrática</p> 	<p>Módulo Direitos Humanos</p> 	<p>Módulo Inclusão Social</p> 
<p>Módulo de Ética: Objetivos</p> <ul style="list-style-type: none"> • Ler, no cotidiano das escolas, reflexões sobre a ética, os valores e seus fundamentos. 	<p>Módulo de Convivência Democrática: objetivos</p> <ul style="list-style-type: none"> • Promover a construção de relações intergrupais nos espaços da escola e na comunidade, por meio de atividades escolares. 	<p>Módulo Direitos Humanos: Objetivos</p> <ul style="list-style-type: none"> • Trabalhar a formação dos direitos humanos visando à construção de valores socialmente desejáveis; 	<p>Módulo Inclusão Social: Objetivos</p> <ul style="list-style-type: none"> • Construir escolas inclusivas, abertas às diferenças e à qualidade de oportunidades para todos os alunos.

評価方法：子どもの成長を継続的にはかる

出典）「Programa Ética e Cidadania Construindo Valores na Escola e na Sociedade 2007」. MEC/SEDH/Secretaria de Educação Básica

2007年の補助教材：テキストと動画のセット

<p>Programa Ética e Cidadania</p> 	<p>Programa Ética e Cidadania</p> 	<p>Programa Ética e Cidadania</p> 
<p>Inclusão e Exclusão Social</p> 	<p>Protagonismo Juvenil</p> 	<p>Relações Étnico-raciais e de Gênero</p> 

参照）「Programa Ética e Cidadania Construindo Valores na Escola e na Sociedade 2007」. MEC/SEDH/Secretaria de Educação Básica

おわりに

今年度の分科会は新型コロナ禍により遠隔開催となったが、6本の報告について検討することができた。また遠隔での開催によって、山本報告と小川報告では利尻とえりもをユニと環境を介して、村越報告と山口報告ではサンパウロと美唄を新型コロナと社会（政治・政策）を介して、遠隔で繋ぐ授業の構想が話し合われた。このような展開はICTの利点と言えるかもしれない。いずれにせよ、今回報告された諸実践は完結したものでなく、継続中である。来年度の方科会では引き続き報告と検討がされることになるだろう。

また、参加者から他分科会ではどのように「自分ごと」としてとらえることができる授業づくりについて検討したが、本分科会での検討は、そこから「自分（たち）はどうするか」であったという感想があった。他の分科会との共同開催も引き続き検討したい。